

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年11月10日



No. 50

©2010 熊本県くまモン

イベント情報 (令和3年11月～令和4年2月)

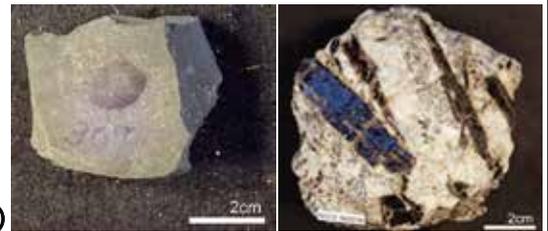
企画展 会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第3回企画展

「くまもとの地質 (宇城市周辺の地質)」

地質の紹介を通して、熊本の土地の成り立ちや生活とのかかわりについて関心をもてる展示です。今回は宇城市周辺にスポットを当てて紹介します。

○開催期間 令和3年10月26日(火)～12月26日(日)



キララガイの化石

ペグマタイト
(巨晶花こう岩)



昨年度の展示の様子

第4回企画展

「ちょっと昔の暮らし探検」

小学校3年生の社会科で学ぶ道具を中心に、昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。

○開催期間 令和4年1月10日(月)～3月13日(日)

フィールドミュージアムに飛びだそう!

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
水辺の冬鳥を観察しよう	熊本市 江津湖	2022年 1月22日(土) 10:00～12:00	20 名	クロツラヘラサギなど、江津湖にやってくる鳥を観察します。	12月20日 ～1月7日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。(往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。)

記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により、日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

～ご来館の皆様へのお願い～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と2m程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を10人程度とするために、入場をお待ちいただく場合があります。

No. 259
植物

ナンゴクウラシマソウ

Arisaema thunbergii subsp. *thunbergii* (サトイモ科)



春の野山で出会って誰もがちょっと驚いてしまう植物の一つが、サトイモ科テンナンショウ属の植物です。仏炎苞^{ぶつえんぼう}とよばれる葉的器官で包まれた花序が、鎌首をもたげた蛇を思い浮かばせます。短いトウモロコシの様な形に集まった果実は秋に熟します。その姿も見た人を驚かせます。

図1の標本は、このテンナンショウ属植物の一つ、ナンゴクウラシマソウです。和名の「ウラシマ」は、日本の昔話「浦島太郎」に由来するという説があります。花序軸の先端(付属体)が糸のように長く伸びており(図1, 2の矢印)、これを浦島太郎の釣り糸に例えたようです。この標本は、当センター

図1 ナンゴクウラシマソウの標本(2015年宇土市) 矢印は糸状に長く伸びる付属体。ジウムパートナーズクラブ雁回山の植物を観る会」の活動で得られました。当センターにはそれまで雁回山産のナンゴクウラシマソウの標本はなかったため、とてもありがたい出会いとなりました。

テンナンショウ属植物はとても魅力的な外観をしていますが、不用意に手を触れないほうが無難です。テンナンショウ属をはじめとするサトイモ科植物の多くは、ヒトにとって有毒で皮膚炎や食中毒を起こすシュウ酸塩を多く含んでいます。料理で里芋の皮をむいて手がかゆくなる原因と同じです。野外で出会ったとき、素手でちぎったり、ましてや口に含むようなことがないように注意しましょう。(前田 哲弥)



図2 開花期のナンゴクウラシマソウ(2015年宇土市) 花序は紫色の仏炎苞につつまれる。矢印は糸状に長く伸びる付属体。

No. 260
民俗

かつぎまた 担股

担股は、ネムノキやヌルデなどの、枝がY字に分かれた股木を二つ用いて作った運搬具です。Y字の間に薪や木炭、稲わら、刈草などをのせ、股に固定した台木を肩に担ぎ、2本の支柱を前後にして両手に握り、バランスをとりながら運びます。県内ではカタゲ、キカタゲなどと呼ばれ、球磨地方の山間部などで使われていました。全国的には紀伊半島、四国山地、九州山地などで確認されています。あまり知られていない道具ですが、炭焼技術の伝播と関わることから注目される道具です。

近世になると都市が発達し、家庭での木炭消費が増え、各地で製炭が盛んとなります。中でも和歌山、高知、鹿児島などは、豊富な資源に加えて良質な炭を作る技術に優れ、さらに江戸、大阪への海上輸送の地の利があったことから木炭の一大産地となりました。やがて、これらの地の技術者が、炭材を求めて自ら渡り歩いたり、雇われたりして全国に移動していききました。宮崎県の東郷町では担股は高知の炭焼が、西米良村では和歌山の炭焼が伝えたといわれているそうです(泉房子著『民具再見』鉾脈叢書1980)。

熊本県内では、明治以降、和歌山、高知、大分、鹿児島などから来た人達が、林業や炭焼などの山仕事に従事していたことが知られています。担股の分布を読み解くことで、県内での炭焼文化の伝播などを明らかにする手がかりとなるかもしれません。(迫田 久美子)



現地名 カタゲ
使用地 球磨郡多良木町黒肥地
昭和20年頃から60年頃まで使用

No. 261
地学

三角岳

三角岳は宇土半島の西端部に位置する標高 405.7m の山で、約400 万年前の火山活動でできた溶岩ドームです。約300～400 万年前、宇土半島の西端から大矢野島では火山活動が活発で、いくつもの火山ができました。三角岳はその中の一つです。三角岳をつくる溶岩は、粘り気が強かったため、流れずに溶岩ドームを作りました。

図1 は三角岳の溶岩ドームをつくっている角閃石安山岩という岩石です。全体的に灰色で、黒く細長い粒（角閃石）がた



図1 三角岳の岩石

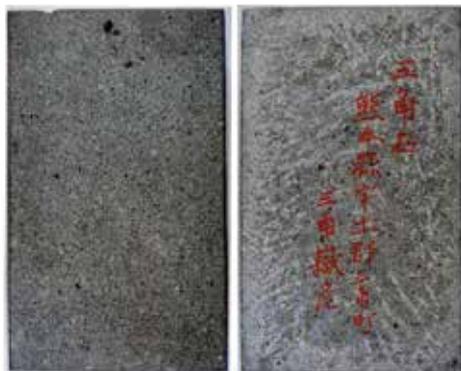


図2 天覧石材標本「三角石」
裏面には石材名と産地が書かれている。

くさん散りばめられ

ています。また、大きめの白い粒（斜長石）が斑点のように見られます。これらは、火山から噴出した溶岩が冷え固まってできた岩石の特徴で、斑状組織といいます。

三角岳の北麓や西麓の一部は崖が海岸に張り出しており、そこには数箇所の採石場があります。三角岳の石は昔から石材や碎石として利用されており、昭和6年の昭和天皇の熊本行幸では、三角岳産の「三角石」が12個の県内産石材とともに天覧に供されました（図2）。（廣田 志乃）

No. 262
歴史

郵便切手貯金台紙（熊本市米村家資料）



図1 表紙

用の台紙で、図2のように全ての枠に貼り付けたあと、郵便局へ持っていくと10 銭の貯金として預け入れることができました。地域によっては、この台紙を使用して小学校で集団的に貯蓄が行われたこともあり、若年層への貯金制度や貯蓄の概念の普及に大いに役立ったようです。

（古澤 広大）

日本に郵便貯金の制度が登場したのは明治8年（1875）のことです。イギリスの制度に倣って採り入れられ、一般の国民に貯蓄をさせることで社会保障としての機能が期待されました。しかし、日清・日露の戦争のあとに、政府の財政や産業振興に大量の資金が必要になると、貯金はその財源として注目され、強く奨励されるようになります。しかし、当時の貯金制度では10 銭以上でなければ預け入れができませんでした。そこで、子供の小遣い銭でも貯蓄の対象にするために始まったのが切手貯金の制度です。5 厘や1 銭などの小額の切手で貯金ができるようになりました。

本資料はそのような貯金奨励の一環で作られたもので、切手を使って貯金をするための通帳です。図1 は5 厘切手



図2 内側

No. 263
動物

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (イシガメ科)

ニホンイシガメ(図1, 2)は、本州、四国、九州と、それらの周辺離島に分布している日本固有の淡水ガメの一種です。甲羅が全体的にごつごつしていて、その後縁がギザギザになっていること、四肢が黄色く縁どられることなどが大きな特徴で、水のきれいな川や池、水路などに生息しています。縁起物として江戸時代以前から人々に飼育され、親しまれてきた存在ですが、近年では「環境省レッドリスト2020」、「レッドデータブックくまもと2019」のいずれにおいても準絶滅危惧とされ、簡単には出会えない種になってしまいました。減少の原因として、水辺のコンクリート護岸化、ペットとしての乱獲、アライグマによる捕食、アカミミガメ(図3)やクサガメ(図4)といった外来淡水ガメの侵入による生息場所の圧迫などが挙げられています。さらに、本種とクサガメとは簡単に交配して雑種をつくり、遺伝子汚染が進んでいることも大きな問題となっています。図5の個体は当センターに隣接する池のほとりで確認されたもので、甲羅のごつごつした感じや四肢の黄色い縁取りなどニホンイシガメの特徴を持っていますが、ニホンイシガメにしては甲羅がやや滑らかで、不明瞭ながら甲羅に3本のキール(隆条)と頬に黄色い筋模様が入り、クサガメの特徴も持っています。こんなに身近なところでも、既に遺伝子汚染が進行しているのです。



図1 ニホンイシガメ標本
(宇土市産)



図2 ニホンイシガメ
(宇城市)

戸時代以前から人々に飼育され、親しまれてきた存在ですが、近年では「環境省レッドリスト2020」、「レッドデータブックくまもと2019」のいずれにおいても準絶滅危惧とされ、簡単には出会えない種になってしまいました。減少の原因として、水辺のコンクリート護岸化、ペットとしての乱獲、アライグマによる捕食、アカミミガメ(図3)やクサガメ(図4)といった外来淡水ガメの侵入による生息場所の圧迫などが挙げられています。さらに、本種とクサガメとは簡単に交配して雑種をつくり、遺伝子汚染が進んでいることも大きな問題となっています。図5の個体は当センターに隣接する池のほとりで確認されたもので、甲羅のごつごつした感じや四肢の黄色い縁取りなどニホンイシガメの特徴を持っていますが、ニホンイシガメにしては甲羅がやや滑らかで、不明瞭ながら甲羅に3本のキール(隆条)と頬に黄色い筋模様が入り、クサガメの特徴も持っています。こんなに身近なところでも、既に遺伝子汚染が進行しているのです。



図3 アカミミガメ(阿蘇郡高森町)



図4 クサガメ(宇城市)



図5 ニホンイシガメとクサガメの雑種(宇城市)

図1のニホンイシガメは、宇土市で採集されたものです。この場所では今のところアカミミガメやクサガメは見られず、比較的安定して本種を確認することができますが、すぐ近くにクサガメの生息地があり、安泰とは言えない状況です。日本が誇るこの美しい淡水ガメが見られる水辺を、いつまでも大切に守っていききたいですね。(中藪 洋行)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約3km

